



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

IFLA参加体験記

著者	板垣 咲希
雑誌名	同志社大学図書館学年報
号	45
ページ	32-33
発行年	2020-03-31
権利	同志社大学図書館司書課程
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2020.0000000047

IFLA 参加体験記

板垣 咲希

IFLA 参加体験記（ギリシャ・アテネ）

2018年度の図書館演習にて行なった VR を使用した図書館サインに関する研究発表のため、アテネにて8月25日から30日にかけて行われた IFLA WLIC (The International Federation of Library Associations and Institutions World Library and Information Congress 2019) に参加した。IFLA WLIC には、8月26日から27日に渡って参加し、ポスターセッションブースにポスターを出展した。私たちは、VR の機械を持っていき、私たちのポスターブースに来てくれた訪問者に研究の説明をした後、実際に VR を体験してもらった。スペインの大学の図書館員は私たちの研究を大変褒めて下さり嬉しかった。研究内容を伝えることはとても難しいものであったが、しっかり伝えられたのではないかなと思う。

ほかのポスターセッションブースに訪れる時間もあった。様々な国で行われた研究を説明していただくことが出来、研究もその国ごとの特徴があるものが多いと思った。その中でも私が最も興味深かった研究は、フィンランドのオウル市立図書館員のポスターであった。オウル市立図書館ではブックメトロというメトロマップを作成し、web サイトを立ち上げた。利用者は地下鉄路線と読みたい本のジャンルを選択すると選択した地下鉄路線にある図書館で利用者の選択したジャンルの本を探し出してくれるシステムであるそうだ。フィンランドでは教育費無償など教育に力を入れている国であると聞いたこともあり、ブックマップのことだけでなく、違う研究や取り組みについても話してくれた。国のもつ教育制度や環境、政治的背景までもが私たちに身近な図書館の在り方を変えているのだと思い、とてもおもしろいと思った。



アトランティス・ブックス（ギリシャ・サントリーニ島）

8月28日にギリシャ、サントリーニ島にあるアトランティス・ブックスを訪れた。サントリーニ島にある唯一の書店であり、観光本にも記載されてあることから、店内は観光客で賑わっていた。希少価値の高い本が多く、どの本も値段が高額であった。雰囲気十分に楽しめる書店であった。



大英図書館・ロンドン図書館見学（イギリス・ロンドン）

8月30日、31日に大英図書館とロンドン図書館の見学へ行った。大英図書館は観光本にも記載があるほど有名な図書館で、入館前には手荷物検査があった。館内には多くの本があり、部屋ごとに本が置かれているようであった。開かれた自習室には高齢者から学生までが勉強や仕事をしたり、本を読んだりしていた。コンセントと無料のWi-Fiが完備されており、飲食も可能であった。私が一番驚いたことは、自習室には授乳している女性や、ランニングをした後にランチを食べている男性など、自習には関係のないことをしている人が多数いたことである。図書館というよりは憩いの場として活用されていると思った。

ロンドン図書館は会員制であったため、残念ながら入館することはできなかったが、外見は映画ハリーポッターにでてきそうな、昔ながらの図書館であり、利用している人も高齢者がほとんどであった。大英図書館とは違った、イギリスの地元の図書館を見ることができた気がした。

バルセロナ大学図書館・バルセロナ日本人学校図書館、書店（スペイン・バルセロナ）

9月1日、2日にはバルセロナ大学図書館とバルセロナ日本人学校図書館を見学した。バルセロナ大学図書館は夏季休暇中であった為か図書館員が2名しかおらず、同志社大学の図書館に比べ、非常に規模が小さい印象を受けた。バルセロナ大学に通っている友人は自習目的でのみ図書館を使用するそうだ。確かに、書架には人はおらず、自習室に数名の学生と数名の老人がいた。

バルセロナ日本人学校は現在幼稚園部から中学部までの生徒が約50名在籍する。また、補習校とよばれる土曜日だけの授業を行っている児童もおり、日本語が堪能でない児童も多いそうだ。そのため、日本語が得意でない児童も本を読めるように、学習漫画をはじめとした漫画が多かった。日本でヒットとなった本も多数あり、比較的新しい本があることに驚いた。費用で購入するほか、在住している日本人が帰国する際に寄付してくれることもあるそうだ。図書館司書教諭もおり、漫画ではなく活字を読む取り組みにも力を入れているそうだ。

スペインでチェーン展開されている書店にも訪れた。村上春樹や東野圭吾などの本もフェイスアップされており驚いた。店内には想像以上に人がいた。現地の友人によると、スペインではKindleなどの電子書籍を利用する人が増えたそうだ。また、小学校でも数年前まではキャリアケースに教科書を入れて登校していたが、現在は教科書も電子化され、そのような光景はみられない。しかし私はカフェでコーヒーを飲みながら本を読んでいる人も良くみかけた。書店も生き残りをかけた戦いの最中なのかもしれない。

シンガポール国立図書館（シンガポール）

9月5日にシンガポール国立図書館に見学へ訪れた。シンガポール国立図書館は7階建てのビルに入っており、地下に図書館がある。私が訪れた日は、2階から上には展示会があった。図書館には開館30分前に行ったが、すでに開館を待つ利用者の列があった。本の返却は自動返却機で行っていた。日本では土浦市立図書館や大分市立図書館でも導入されているそうだ。貸し出しも全て機械が行っていた。図書館員は開館の際、入り口で挨拶をしてくれた以来、見かけることはなかった。多民族国家であるため、様々な言語の本や新聞があった。子供の本のみを置いてある部屋もあり、毎日紙芝居などを行っているそうだ。多数の国の図書館を見学したが、一番日本に似ている図書館であった。